

学校運営方針／具体的取組(評価の観点)		アンケート状況		成果(□)と課題(■)	改善策	自己評価	
		教職員(%)	保護者(%)				
1 危機管理意識を高くもち、安全安心な学校をつくる。	【教職員】 学校は、スクールバス乗車規定や危機管理マニュアル等の策定と運用を適切に行い、安全に関する配慮事項の検討と指導を十分に行っている。 【保護者】 学校は、事故防止や危機等に対する研修や備えを十分に行い、危機管理意識をもって教育活動を行っている。	A	75%	58%	□スクールバス安全管理マニュアルや危機管理対応マニュアル等、必要な改定、見直しを行うことができた。 □マニュアル等を活用した教職員研修を行い、緊急時への対応や疑問点等について多くの教職員が自分事として捉え考える機会となった。 ■教職員の研修の積み重ねにより、児童生徒の安全が守られているということを保護者に知ってもらう機会が少ない。	・今後もマニュアルの必要な見直し改善を繰り返し、安全に関する啓発を適宜行いながら、教職員への研修、児童生徒への指導に努める。 ・学部や学年で実施している取組については、保護者会や学部だより等で目的や内容を今後も丁寧に説明する。	○
		B	24%	39%			
		C	0%	1%			
		D	2%	1%			
		E	0%	1%			
(2)	【教職員】 学校は、各種訓練や教室や廊下等の施設設備の安全管理等、危機管理意識をもち取り組んでいる。 【保護者】 学校は、様々な避難訓練や引渡し訓練を通して、緊急時に備えた指導をしている。	A	66%	81%	□引き渡し訓練の参加率は、R3の50%から69%に上がった。地震リュックの準備や非常備蓄品の試食など、保護者への理解促進につながった。 □教職員には、危機管理に関する研修を行い「自分事」として考える良い機会となった。 □学部単位でもヒヤリハット意識をもち指導にあたることできている。 ■年間を通して実施している避難訓練の反省を全体に周知できていない部分もある。	・今年度の実践を基に、指導方法や手立て、教材、生活力に関するチェック表についても引き続き検討を重ねる。 ・今後も家庭と連携して生徒の持てる力の育成を図ることができるよう、保護者会や授業参観、懇談、学部だより、ホームページ等を活用して学習の様子や生徒の変容等を積極的に伝え理解と協力を仰ぐ。	◎
		B	34%	19%			
		C	0%	0%			
		D	0%	0%			
		E	0%	0%			
(3)	【教職員】 学校は、感染症対策を適切に行い安全安心な環境を整備できている。 【保護者】 学校の教室や廊下等の施設設備や感染症対策は適切である。	A	71%	58%	□県の指針・指導に沿って対応することができた。また、教職員が行う消毒の一部を教員業務支援員の協力を得ることで教員の業務軽減を図ることができた。 □検温を含めた児童生徒の健康観察、自宅での療養や医療機関の受診など、家庭との連携を図ることができた。さらに、校内の感染状況や県からの通知等、適切な情報提供に努めることができた。	・今後も、県の指針・指導に沿って適切な対策を講じる。	◎
		B	29%	41%			
		C	0%	0%			
		D	0%	1%			
		E	0%	0%			
(4)	【教職員】 学校は、いじめの未然防止・早期発見に向けた対策の検討を行い、教員間の連携・組織的な対応が十分できている。 【保護者】 学校は、いじめの未然防止や早期発見・対応に対する取組として、日々の子供同士の間での見守りや聞き取り、アンケート調査等を十分に行っている。	A	59%	58%	□毎年必ず、2学期初めに「いじめに関する研修」を行っている。いじめに対する教職員の理解促進が図られたことで、多くの教職員が児童生徒の丁寧な観察、また子どもの気持ちに寄り添った対応をしている成果と言える。	・今後も、保護者が小さな悩みや困り感を話せるような態勢を学校全体で維持できるよう啓発する。併せて、教育相談の利用も促せるよう懇談等でチラシを配付し周知する。 ・各学部においては、係を中心とした情報提供や担任等とのやりとりを行うとともに、『いじめ情報共有シート』を活用して、教員間の連携・組織的な対応を目指す。	○
		B	37%	40%			
		C	2%	1%			
		D	0%	0%			
		E	2%	1%			
(5)	【教職員】 学校は、児童生徒の人権を尊重し、自己肯定感を高められるよう一人一人の実態に配慮した授業や指導を行っている。 【保護者】 学校は、児童生徒一人一人を大切にされた指導をしている。	A	49%	67%	□学部会等で「人権意識チェック」を継続して行っていることで、多くの教員が児童生徒一人一人を大切にされた指導を心掛けることができた。 ■自己肯定感を高めることができているか、という点において数値化されないため、指導に自信がもてない教員が少なからずいる。	・今後も、「人権意識チェック」を継続し、教員一人一人の人権意識の維持・向上に努める。 ・約9割の保護者が「児童生徒を大切にしてくれている」と感じている。教員が自分の指導に自信をもつことができるよう、このような保護者の心情を教員にフィードバックする。	○
		B	48%	28%			
		C	2%	1%			
		D	2%	1%			
		E	0%	3%			

令和4(2022)年度 教職員・保護者アンケート結果及び自己評価

評価基準 ◎十分達成されている ○おおむね達成されている △半分程度達成されている ×努力が必要である

学校運営方針／具体的取組(評価の観点)		アンケート状況		成果(□)と課題(■)	改善策	自己評価	
2 様々な方面における社会に開かれた学校づくり		教職員(%)	保護者(%)				
(1)	【教職員】 学校は、懇談の機会や各種通知を利用したり、閲覧しやすいホームページの工夫と活用を行ったりすることで、学校運営の方針や教育活動の様子を保護者や地域に分かりやすく伝えている。	A	59%	44%	<input type="checkbox"/> 懇談などで保護者が来校したときには実際の教材教具を直接見せながら説明したり、学級だより等では写真や説明文を分かりやすく記すことに努めた。 <input type="checkbox"/> ホームページと一斉メール、紙の通知の使い分けに慣れ、適切に通知することができた。特にホームページでは、学部の取組を中心に、積極的な掲載が進められている。 <input type="checkbox"/> ホームページや一斉メールの活用について、PTA総会や学部の保護者会で説明することで一定の理解が得られた。 <input checked="" type="checkbox"/> 保護者側には、ホームページ記事と一斉メールの数や見やすさ、二つの関係に慣れない面もあるのではないかと。	・仕様変更後のホームページがスマートフォンでも見やすいように情報部を通して業者と調整をする。 ・内容や回数、掲載するページ等を含め、ホームページ記事掲載のポイントをまとめて年度始めに周知する。特に行事後のお知らせ記事は、簡潔なものを、事後速やかに回数を多く掲載する。 ・一斉メールに関して、重要な連絡と簡易なお知らせを、タイトルで分かるように工夫する。また、担当者間で連携して送信のタイミングに注意をし、重要な連絡が簡易な通知に埋もれないようにする。 ・ホームページの閲覧状況や一斉メールへの意見等、保護者側の状況を把握する。	○
		B	41%	53%			
		C	0%	4%			
		D	0%	0%			
		E	0%	0%			
(2)	【教職員】 学校は、交流及び共同学習、校外学習、進路に関する学習等を通して、地域資源を活用して児童生徒の経験を広げ、社会性の育成を図っている。	A	64%	58%	<input type="checkbox"/> 学校がどのような形で地域資源を活用した学習を行っているか、広く知っていただけるよう、「地域とのつながり」を意識した進路だよりを作成することができた。 <input type="checkbox"/> 地域の理解と協力を得て、校外における学習活動を再開し、児童生徒の社会性の育成を図ることができた。 <input checked="" type="checkbox"/> 交流や校外学習等については、一部内容を変更した形で実施したが、様々な事情により内容、規模の縮小せざるを得なかった。	・今年度の実践を基に、指導方法や手立て、教材、生活力に関するチェック表についても引き続き検討を重ねる。 ・今後も家庭と連携して生徒の持てる力の育成を図ることができるよう、保護者会や授業参観、懇談、学部だより、ホームページ等を活用して学習の様子や生徒の変容等を積極的に伝え理解と協力を仰ぐ。	○
		B	36%	39%			
		C	0%	3%			
		D	0%	0%			
		E	0%	1%			
(3)	【教職員】 学校は、学校支援ボランティアの活用により、地域の人材を生かして教育活動の充実を図るとともに、学校見学会や巡回相談等により、地域へ貢献するよう努めている。	A	71%	54%	<input type="checkbox"/> 学校見学会(本校)や夏季研修会(オンライン)を円滑に実施することができた。地域の関係機関からの参加希望が多く、本校への関心の高さがうかがえる。今年度は早期教育相談を、年間を通して実施することができた。 <input type="checkbox"/> 学校支援ボランティアの登録数が増え、継続した受入れができた。お互いにメリットがあることの表れと思われる。 <input checked="" type="checkbox"/> 保護者への情報提供の方法に工夫の余地がある。	・今後も学部ごとのニーズを把握し、それに合致した人材を活用することで、より積極的にボランティアを受け入れる。 ・PTA総会や保護者会、オープンスクール等の機会にボランティアの活用をはじめとする学校の取組を紹介する。 ・保護者が来校する行事にボランティアが関わっている場合には、その場で紹介をする。 ・県の指針に基づき、可能な方法で授業や行事を地域に公開する。来校者からのフィードバックを得る方法を考え、実践する。	◎
		B	29%	40%			
		C	0%	4%			
		D	0%	0%			
		E	0%	3%			
	【保護者】 学校は、ボランティアの協力を得たり、ホームページ等で情報を発信したりすることを通して、開かれた学校づくりを行っている。	C	0%	4%			
		D	0%	0%			
		E	0%	3%			

令和4(2022)年度 教職員・保護者アンケート結果及び自己評価

評価基準 ◎十分達成されている ○おおむね達成されている △半分程度達成されている ×努力が必要である

学校運営方針／具体的取組(評価の観点)		アンケート状況		成果(□)と課題(■)	改善策	自己評価	
3 学習指導要領を踏まえた授業改善と充実を図る。		教職員(%)	保護者(%)				
(1) 小学部	【教職員】 学校は、児童が主体的に学習する中で、各教科の基礎基本が習得できるよう工夫して授業を行っている。 【保護者】 学校は生活習慣の形成や集団での活動、ことば・かず、体づくりなどの基礎基本となる学習を効果的に行っている。	A	31%	77%	<input type="checkbox"/> 学部の研修にて「教育課程編集の手引き」にある各教科の内容を読み合ったり、録画した授業を全員で見て振り返りを行うことを継続していることで、教員の意識をより高めたり、授業の組み立てや指導の手立て等、授業の質を高めることができた。 <input type="checkbox"/> 毎月の学級便りに授業の中で扱っている各教科の内容について具体的に載せるようにしたことで、保護者の理解を得ることができた。保護者アンケートでも「わからない」を選んだ保護者がいなかった。 <input checked="" type="checkbox"/> 授業を振り返る際に、児童には評価◎○△で簡単に評価できるようにしたが、授業者(教員)の評価もできるようにしておくよかった。	・今後も課題別研修でよりよい授業づくりのための改善を図る。 ・今後も、保護者の理解を促すために、学部・学級だよりや個別懇談、ホームページ等で児童の様子をより丁寧に具体的に知らせる。 ・教師が自信をもってAに回答できるよう、公開授業の際には、授業者(教員)自身の評価や授業についての評価を取り入れる。	◎
		B	69%	23%			
		C	0%	0%			
		D	0%	0%			
		E	0%	0%			
(1) 中学部	【教職員】 学校は、生活に必要な衣食住に関する力を育成するために効果的に指導をしている。 【保護者】 学校は、生活に必要な掃除や洗濯、食に関する力を育成するために体験的で分かりやすい指導を行っている。	A	67%	67%	<input type="checkbox"/> 学年ごとに清掃や洗濯、食に関する内容を取り上げ、職業・家庭科の学習を中心に学校生活の中で実践を重ねたことで生徒の知識やスキル向上が見られた。 <input type="checkbox"/> 課題別研修の際に、各学年における取組について共通理解を図り、指導の改善や家庭との連携等につなげることができた。 <input type="checkbox"/> 保護者からのC・E回答も少なからずあるが、保護者会や授業参観等で丁寧な説明に努めたことで、学部としての取組が保護者に少しずつ理解されてきていると思われる。	・今年度の実践を基に、指導方法や手立て、教材、生活力に関するチェック表についても引き続き検討を重ねる。 ・今後も家庭と連携して生徒の持てる力の育成を図ることができるよう、保護者会や授業参観、懇談、学部だより、ホームページ等を活用して学習の様子や生徒の変容等を積極的に伝え理解と協力を仰ぐ。	○
		B	27%	24%			
		C	7%	5%			
		D	0%	0%			
		E	0%	5%			
(1) 高等部	【教職員】 学校は、卒業後の生活を意識して、生徒の意欲や自信を育てるよう、作業学習を中心に、主体的に意思等を表現したり行動したりするための指導・支援をしている。 【保護者】 学校は、卒業後の社会生活を見据え、作業学習を中心に自ら意思を伝えたり、行動したりする力の育成を行っている。	A	55%	65%	<input type="checkbox"/> 日頃の作業学習や課題別研修、公開授業等をとおして、教員が実践の工夫や生徒の変容等を共有することで、その後の授業や生徒の指導・支援に生かすことができた。 <input type="checkbox"/> 卒業後の生活において「自分から表現する・行動する」必要性和大切さを認識し、学校での取組への関心を高めることができた。 <input checked="" type="checkbox"/> 他教科や実習先等、いろいろな場面において、身に付けたことを生かして表現したり行動したりできるようになることが今後の課題である。 <input checked="" type="checkbox"/> 清掃場面を中心に「主体的に行動する力」の充実を目指したが、指導・支援を進めるにあたり、指導するポイントを絞ったり、計画的に取り組んだりすることが難しかった。	・今年度の成果や反省を基に、実践を継続する。指導の方向性やポイント、方法等をまとめ、高等部全体での共通理解を図り計画的な指導実践に努める。 ・今後も保護者会(個別懇談を含む)や学部だより、ホームページ等で卒業後の生活を意識した指導実践を継続して丁寧に伝える。	○
		B	40%	35%			
		C	5%	0%			
		D	0%	0%			
		E	0%	0%			

学校運営方針／具体的取組(評価の観点)		アンケート状況		成果(□)と課題(■)	改善策	自己評価	
3 学習指導要領を踏まえた授業改善と充実を図る。		教職員(%)	保護者(%)				
(2)	【教職員】 学校は、育成を目指す資質・能力の三つの柱を各教科等と関連づけ、様々な機会 で授業評価に取り組み、PDCAを確実に 行いながら授業づくりを行っている。	A	33%	76%	<input type="checkbox"/> 年間指導計画に知・思・学を記入したことや学習指導部からの適時的な情報提供により評価を行う教員の意識向上につなげることができた。 <input type="checkbox"/> 学部の取組や個別の指導計画等、より丁寧に、そして的確に保護者に説明することができている。 <input checked="" type="checkbox"/> 育成を目指す三つの柱と各教科との関連について、研修や学部会等で共通理解を図り、よりよい授業づくりのために課題別研修を継続する必要がある。 <input checked="" type="checkbox"/> 作業学習や音楽等の縦割りの授業において、授業者と担任等間の、指導の手立て、生徒の変容や評価等の共有場面が限られている。	<ul style="list-style-type: none"> 今後も公開授業やVTRによる授業研究会等を継続する。併せて、育成を目指す三つの柱と各教科等を関連付けた客観的評価ができるような取り組みをとってPDCAを確実にを行い、よりよい授業づくりに生かす。 児童生徒の変容や評価を確認・共有できるよう、作業日誌等、生徒自身の振り返りも含めた授業の記録を活用する。 今年度の実績を踏まえて、年間指導計画の反省に担当者が確実に記入することで来年度の授業実践に生かす。 	○
		B	63%	24%			
	【保護者】 学校は、個別の指導計画や個別懇談等で 目標や手立てを分かりやすく説明している。	C	2%	0%			
		D	0%	0%			
		E	2%	0%			
(3)	【教職員】 学校は、児童生徒が興味・関心をもって主体的に学習に取り組み、児童生徒同士や教師との対話や表現活動を通して学びが深まるような授業を実践している。	A	55%	64%	<input type="checkbox"/> 課題別研修だけでなく、学部会、ブロック会、学年会等で児童生徒が主体的に学習に取り組むことができる教材や環境等について話し合わせ、共通理解のもと授業実践することができた。 <input type="checkbox"/> どの学部も児童生徒の発表場面や対教師だけでなく、友達同士でやり取りを行う場面に授業の中に積極的に取り入れ、児童生徒主体の授業づくりに取り組んだ。 <input checked="" type="checkbox"/> 発表の場面では、発語がない、コミュニケーションに苦手意識がある児童生徒の活躍の場に制限がある。(どうしても話せる生徒が目立ってしまう)会話に苦手意識がある生徒が「伝わった」という満足感や達成感を味わえる支援の方法を探っていく必要がある。併せて、発語のない児童生徒にとっての対話や表現活動の捉え方について、教員間の共通理解も必要である。	<ul style="list-style-type: none"> 今後も継続して児童生徒が発表したり、友達同士、対教師、または教師を介在させた友達同士でやりとりができる授業づくりに努める。 音声でのやりとりが難しい児童生徒に対して身振りや絵カード、サインなどを本人にとって有効なコミュニケーションツールも活用した指導を続ける。 発語のない児童生徒にとっての対話や表現活動の捉え方について、教員間の共通理解を図る。 	○
		B	43%	32%			
	【保護者】 学校は、児童生徒が興味・関心をもって主体的に取り組み、友達や教師とのやり取りや発表等の活動を通して学びが深まるように授業を行っている。	C	2%	3%			
		D	0%	0%			
		E	0%	1%			
(4)	【教職員】 学校は、発達段階や障害の状態等に応じ、ICT機器を活用した授業を行っている。	A	65%	51%	<input type="checkbox"/> 調べ学習以外にも活用実践事例が増えている。小学部では、朝の会や帰りの会でタブレットを使用することで、発語の少ない、あるいは発語のない児童でも、一人で会を進めることができ、児童の自信につながっている。 <input type="checkbox"/> 保護者会では実際に保護者が児童生徒のタブレットを使用して資料を見たり、授業参観でICT活用した授業実践を見学してもらう機会を設定したことで保護者にICTの活用状況を知ってもらう機会となった。 <input type="checkbox"/> 情報部からの情報提供やICT支援員による研修により、教員の知識と理解が進んでいる。ICT機器の活用が活発になり、授業での実践場面や活用事例が増えた。 <input checked="" type="checkbox"/> タブレットの持出規定について明確にし、教職員で共通理解する必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> 今後も活用事例の収集を継続し学校全体で取組の様子や成果、課題の共有を行う。また、研修等を通してよりよい授業づくりのための活用を推進する。 特別支援教育における活用方法について、研修、共有、実践を継続し、教員が一定のスキルを習得できるようにする。 学習指導部と情報部とで連携し、より効果的な研修を提供する。 タブレットの家庭への持ち出しについて規定を毎年見直し、年度初めに教職員に周知する。 無償で使用できるアプリを授業で使用し、懇談時に家庭で使用希望があった場合、持ち出して使用できるよう対応する。 	○
		B	35%	40%			
	【保護者】 学校はタブレットや電子黒板などのICT機器 を活用した授業や取組を行っている。	C	0%	0%			
		D	0%	0%			
		E	0%	9%			